



罪と罰について



ヤマダヒフミ

人生とは矛盾に満ちたものであり、波乱に満ちたものである。誰でも一歩先は闇であり、それを恐れる。だが、だからこそ、光もまた待っているかもしれない。

ラスコーリニコフは自らが籠っていた部屋を出て、怖ろしい殺人を犯してしまう。だが、「何故」、彼が部屋から出るかは物語の中では語られていない。だがそれは次のような言葉によってかろうじて説明されるのみだ。

「たとえ行き場がどこにもなくたって、人はどこかに行かなくてはならない——」と。

そしてまた、もう一つ語られていない真実がある。それは物語のラストの部分、ラスコーリニコフがいわば、改心をするシーンだ。彼は恋人の手を握り、遠い昔の牧畜の生活を眺めながら、ふと新しい生に目覚め、これまでの観念に囚われた生活を脱ぎ捨てる。ここでも著者はその「理由」を述べてはいない。・・・思うにこの箇所には理屈はないのだ。だが、この理屈のない場面はただ、頭脳の欠如——観念の欠如ではない。観念が最大限に回り、高速回転し、その果てに現れる「理屈のない場面」なのだ。

人生とは矛盾に満ちたものであり、一寸先は闇である。そして闇が待っているかもしれないが、それと同じ理由でまた光があるかもしれない——。歩むのは自分の足である。紡ぐのは自分の人生である。それはラスコーリニコフのように(あんな兇行は犯さないにしても)、矛盾に満ちたものであり、間違いだらけのものであるだろう——。だがそれ故に、そう、それ故にまた——正しさと理屈を人の足は越えていくのだ。僕はそう思う。僕はその事をドストエフスキーから——「罪と罰」から受け取った。